（別紙５－１）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【授業担当者】

所属/職名：法文学部准教授/グローバルセンター特任准教授

氏　　名：酒井佑輔/森田豊子

授業科目名	海外異文化体験実習（イスラームの多様性を学ぶ）
研修先 （大学・国・都市名）	アンカラ大学（トルコ・アンカラ）
研修期間	令和4年9月20日　～　令和4年10月1日

［研修の目的・概要］

本研修ではイスラーム理解及び、ムスリムとの対話の促進を目的にトルコを訪問する。現在世界人口の四分の一を占めようとしているムスリムとの協働のためにも今後ムスリム社会の理解は必要である。トルコは人口の90%以上がムスリムで、第1次世界大戦後にオスマン帝国が解体し、トルコ共和国として独立を果たした国である。共和国建国後、近代西洋化を目指し、政教分離政策を取っていることから、一部脱宗教化も進んでいるが、近年のエルドアン大統領政権では、政治や社会におけるイスラーム化が目指されるなど、常に世俗化とイスラーム化の間で揺らぎのある国家である。そのような国家で都市部のイスタンブールと地方のコンヤなどを訪れ、社会におけるイスラームのあり方を比較検討する。また、①実際にトルコの学生や市民との交流を通して、イスラームの多様性を理解する。②難民送り出し国でもあり、受け入れ国でもあるトルコでシリア難民からお話を聞き現状を学ぶ。③本プログラムを実施するための協定校（アンカラ大学大学）との連携を強める、などにより、世界においてムスリムとの共生、協働について考える。

〔研修の成果〕 ＊事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。

第一に、事前学習においては、1）アンカラ大学から留学中のトルコ人留学生にトルコについて、トルコ語についての話を聞いた。2）またzoomを利用してアンカラ大学の学生と事前に交流を行うことができた。研修においては、1）地中海沿いのイズミールでギリシア時代から残る遺跡を見学し、ムスリムが多数の国家であっても、今でもギリシア人住民が残るこの地域でギリシア時代の遺跡が観光資源として丁寧に扱われていることを理解した。2）次に、コンヤを訪れ、イスラーム神秘主義の拠点メブラーナのセマー儀式を見学し、イスラーム色の強い街の様子を感じ取ることができた。13世紀にまでさかのぼることのできるトルコのイスラームの伝統について理解できた。3）アンカラでは、トルコ共和国建国の父であるアタチュルク廟を見学し、トルコ・ナショナリズムの現状について学んだ。さらに、アンカラ大学日本語学科の学生との交流を行った。日本や鹿児島を紹介するプレゼンテーションを行った後、日本や鹿児島とトルコの文化や社会の違いについてディスカッションを行った。アンカラ大学の日本語学科の学生の中には、以前、鹿児島大学に留学していた学生もおり、これからも活発な交流を続けることを約束できた。さらに、アンカラ最終日には、シリア難民で現在アンカラ在住のクルド人の方からお話を聞き、彼らの現状について理解することができた。4）最終目的地のイスタンブールでは、オスマン朝の歴史を学んだ。オスマン朝は、第1次世界大戦で崩壊するまで、国内にユダヤ人、アルメニア人、クルド人などの多くの民族を抱えた帝国であり、今回、オスマン朝の遺跡や博物館を見学することによって、帝国時代のトルコの歴史について学ぶことができた。以上のように、四つの都市を回ることによって、トルコの多面性を理解することができ、それぞれの都市におけるイスラームの多様なあり方を深く理解できたと思う。事後学習では、11月5日に開催される報告会に向けて、研修で得た学びについてディスカッションし、それを学内の学生だけではなく、地域の方々に向けても発表する予定である。

〔今後の課題〕

今回で2回目のトルコ研修ではあったものの、2020年度、2021年度には新型コロナウイルスの感染拡大により、研修が実施されなかったために、1回目の経験を次回に活かすことが難しく、何もかも一から始めるのと同じくらいの労力がかかった。帰国前のPCR検査を行う準備、学生には事前に体温を測っておくように指導するなど、前回には必要なかった準備も必要となった。また、今回は、帰国直前にパスポートをなくした学生がおり、引率者が一緒に残って対応しているうちに、帰国便の機内食でアレルギー症状を起こした学生がいて、引率者が一人であったために、その学生の救援が遅れてしまった。今回、協定校のアンカラ大学の学生がパスポート発見に協力してもらえたが、今後は引率者を増やすなどの対応が必要になってくると思われる。